防災にも威力 自治体注目

簡易型ＬＰガススタンド全国へ普及

カグラベーパーテック「オートコンポ」

カグラベーパーテックの簡易型ＬＰガススタンド「オートコンポ」が全国に普及している。省スペース、敷地内での燃料充填、燃料コスト削減の利点に加え、最近では国土強靭化に基づく防災対策上の重要性が認められ地方自治体からも熱い視線が注がれている。各地で活躍する姿を紹介する。

山形・酒田市

官・民で魅力発信

ケイテック「ＬＰＧ車を身近に」

酒田市のプリウスＬＰＧハイブリッドを点検する小松豊社長。充填なしで2000㌔近く走る点も評価されている。利便性向上には「オートコンポ」は不可欠だ。

「ＬＰガス車の魅力を酒田から世界に発信しよう！」日本海に面した庄内平野の代表都市、山形県酒田市。かつて北前船交易により商人の街として繁盛した活力ある土地柄を生かし、官・民でＬＰガス自動車を全国、世界に広げようと動き出している。

ＬＰガスハイブリッド（バイフューエル）自動車の改造・販売を手掛けるケイテック（同市大宮町、小松豊社長）は創業14年目。昨年、同市と災害協定を結び会社敷地内に「オートコンポ」を設置。だれでも利用できるＬＰガススタンドとして今年1月末に操業を開始した。

同市とケイテックとの関わりは２０１４年。後藤仁酒田市議会議員が同社のプリウス・ＬＰガスハイブリッド車に目を留め、市も同調。災害時の燃料分散化にと公用車に採用した。

市はより多くの市民に見てもらおうと車体にＰＲをペイントし、県内外の遠距離用に使った。東日本大震災でのガソリン不足を体験した後とあって注目を集め、市の採用を知った市内企業に30台ほど広がった。

永田斉市総務部市政推進調整監は「経済効率もよく危機管理に有効だ。今後も公用車に拡充していく。若手が率いる地場の高い技術を後押ししたい」と意気込む。

「オートコンポ」はＬＰガス自動車普及を支える縁の下の力持ちだ。出勤前や退社後に立ち寄って充填できるよう営業時間を午前7時半～午後7時に。小松社長は「一般のオートガススタンドと違い設備費も安く、手続きもシンプルで改造メーカー、整備工場でも設置できる。改造、販売、メンテ、燃料充填のトータルサービスを確立しＬＰガス車を身近な存在に押し上げたい」と語る。

酒田市は周囲10㌔の離島「飛島」も抱える。三つの集落は津波水没想定地域。市は水没に備え、高台に「オートコンポ」などのＬＰガス設備の設置も検討したい考えだ。

ＬＰガス災害対策先進地へ地元の夢は膨らむ。

静岡・湖西市

災害時 避難所へ供給

遠鉄タクシー 経産省の助成活用

２０１７年11月末から「オートコンポ」の使用を開始しているのが遠鉄タクシー（丸山晃司社長）の湖西（こさい）営業所。災害時にＬＰガスを避難所へ供給する協定を湖西市と締結し、経済産業省の助成制度を活用して導入した。

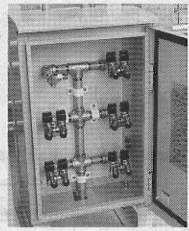
静岡県で最も西に位置する湖西市。浜松交通圏の中でもとりわけ地域に密着した営業所となっている。

「オートコンポ」を導入することになったのは、地元のＬＰガススタンドの撤退がきっかけだった。16年夏に「17年5月末で閉鎖」との通知を受けた。無くなれば、わずか1・3キロほどの距離で済んでいた燃料充てんが、浜松市内にあるスタンドまで約40分かけて向かうことになる。

営業所の車両26台のうち23台がＬＰＧ車。「往復で1時間半近くの時間を充てんに取られては地元のお客様に迷惑がかかる」（山下春男所長）。スタンド側との話し合いの中で浮上したのが自家スタンド設置という選択肢だった。

スタンド設置に必要な広さがなかった湖西営業所は、これを機会に移転をすることになり、現在の場所へ。17年10月に開所し、11月末からの「オートコンポ」稼働となった。

それでも地元スタンドが閉鎖となった17年5月から約半年は、充てんのため浜松市内まで往復していた。時間が取られタクシーの売り上げにも響いていたといい「自家スタンドが稼働した昨年からは営業所の売り上げも戻った」（鈴木隆志総務課長）と効果は明らか。同社では、燃料単価の削減と効率面で効果のあった自家スタンドを別の営業所でも導入できないか検討しているという。



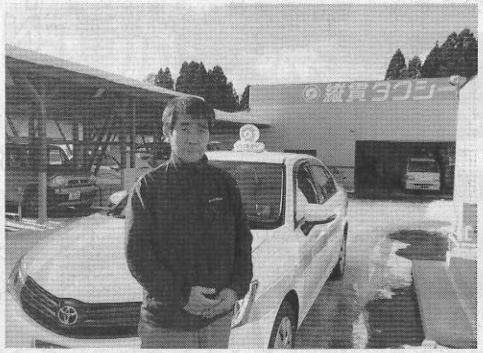
湖西市との災害協定で、緊急時に炊き出しや発電ができるようガス栓ボックスも用意されている

湖西営業所のガススタンド。敷地に供給施設ができたことで、より地域住民への需要に応えやすくなったという

青森・上北郡

苦境の3セクを再生

縦貫タクシー 燃料コスト大幅減



ＬＰガスで走るカローラと上野久明社長。「疲弊する地方タクシーのイメージを覆したい」と語る

下北半島の付け根、青森県上北郡。「縦貫タクシー」（本社・上北郡七戸町、上野久明社長、44台）は、かつての〝3セク〟鉄道会社が経営合理化を理由に切り離した赤字のタクシー事業をよみがえらせたユニークな会社だ。

野辺地～七戸間20㌔を運行するローカル線・南部縦貫鉄道は１９９７年の廃線後も「（株）南部縦貫」としてタクシー事業を継続していた。しかし東日本大震災が打撃となり、２０１３年、売却が決定する。赤字事業の買い手はなく廃業の危機が迫った。その時、名乗りを上げたのが野辺地町で自動車整備販売業を経営する上野久明社長だった。

黒字化を掲げた上野社長が真っ先に目を付けたのは「燃料コスト」。すぐにＬＰガスとガソリンのバイフューエルに改造したトヨタ・カローラの新車16台を代替投入。燃費低減が即効、さらに3台を追加し、ジャンボタクシー（ハイエース）5台もＬＰガス仕様に改造した。

並行して「オートコンポ」の導入に着手。２０１５年、片道30㌔超のスタンド通いに悩む六カ所村（尾駮（おぶち）営業所）に1基目を、翌年には七戸町内唯一のオートスタンド撤退に合わせて本社営業所に2基目を配備した。

「プロパンガスを卸業者から直接購入するので、オートコンポ導入後、燃料代は3割低下し月間38万円も浮いている。結果、経営に余裕が生まれ、乗務員の賃金確保のほか設備投資や内部留保もできるようになった。今、タクシー会社の経営に希望を持っている」と上野社長の表情は明るい。

一般への販売に必要な高圧ガス製造保安責任者、高圧ガス販売主任者も確保し、地域にも利用されている。部活動の遠征などでＬＰガスのマイクロバス2台を活用する地元県立高校もお得意さんだ。

「震災後の苦しい時に経営を始め、再生できた。今度は地域の観光やビジネスの発展に貢献してタクシーが活躍する場を広げていきたい」と力を込めた。

企画・制作　東京交通新聞社広告部　　カグラベーパーテック株式会社　〒661-0025 兵庫県尼崎市立花町１-２-１　TEL06(6429)5820　http://www.kagla.co.jp/